

# 発達障がい児童生徒への指導のポイントを「教職実践演習（中高保健体育）」に導入する試み

著者	瀧澤 聡, 成田 正則, 田中 謙
雑誌名	北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要
巻	8
ページ	13-26
発行年	2017
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00002566/">http://id.nii.ac.jp/1136/00002566/</a>

## 発達障がい児童生徒への指導のポイントを 「教職実践演習（中高保健体育）」に導入する試み

Introducing the teaching points for students with Developmental disorders to  
“Teaching Practice(health and physical education at lower secondary and upper  
secondary schools)”

瀧 澤 聡<sup>1)</sup>  
Satoshi TAKIZAWA  
田 中 謙<sup>3)</sup>  
Ken TANAKA

成 田 正 則<sup>2)</sup>  
Masanori NARITA

### I はじめに

2006年の中央教育審議会答申を受けて、「教職実践演習」は2013年度後期から教職課程を履修する4年次生の必修科目になった。そのねらいは、「教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するもの」とされ、「学びの軌跡の集大成」として位置付けられている（中央教育審議会2006）。さらに、「本科目には、教員として求められる以下の4つの事項を含めることが適当である（中央教育審議会2006）」とし、4つの事項とは、「1. 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項」「2. 社会性や対人関係能力に関する事項」「3. 幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」「4. 教科・

保育内容等の指導力に関する事項」（中央教育審議会2006）である。これらは、教職を目指す学生に必要な資質能力として捉えることが可能と思われ、各事項のそれぞれに到達目標と確認指標例および大学等の授業で扱う内容として9例が示されている。さらにそのための授業方法等が提示され、具体的には役割演技（ロールプレイング）やグループ討論、実技指導等であり、大学側が本科目の授業に対して効果的に展開されるような工夫も重要であるとした。

一方で、2007年4月に学校教育法の一部の改正により特別支援教育が実施され、これにより全ての学校で全ての教員等は、障がいのある幼児児童生徒の指導を充実していくように取り組むことになった。実際、この答申における「教職実践演習」の授業内容例には、今日的な教育課題の一つとして特別支援教育

---

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 室蘭工業大学

3) 山梨県立大学

があげられている。「教職実践演習」の中に特別支援教育に関連する内容を取り上げている大学がわずかであるがみられる。

例として、名古屋学院大学では、「教職実践演習」の授業計画15回のうち8回目において「特別支援教育」をテーマとした授業を実施した（國原2016）。その内容は、「特別支援教育とその意義、動向、教育の方法について解説し、障がいのある生徒にどう対応するかを具体的事例から個別・班単位で考え、授業後の調査課題として、ある特別支援学校の特色と指導上参考にしたいこと」をまとめさせることだった（國原2016）。また秋田大学では、「教職実践演習」の授業計画15回のうち4回目において「「困っている子」への支援のポイント」というテーマで授業を実施した（姫野他2011）。その内容は、県内の養護学校に勤務する教員を講師として招き、「「困っている子」への支援のポイント」について30分間講義し、30分間の演習も取り入れる等であった（姫野他2011）。しかし、上記2大学のように特別支援教育を授業の中に取り入れ、その成果等を積極的に発信している大学は、CiNii（NII学術情報ナビゲータ）で「教職実践演習」に関する先行研究を検索しても、ほとんどみられないのが現状のようである。

本学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科では、教職課程において、希望する学生は所定の単位取得を達成させることで、主免許「中高保健体育一種」ばかりではなく、副免許「特別支援学校一種」の取得も可能である。この教職課程の特別支援教育を担当する第一筆者は、昨年度から「教職実践演習」をオムニバス方式で担当することになったが、他の教職担当者と協議の上、今年度は積極的に特別支

援教育をこの授業の中に導入することとした。なぜなら、上記の中央教育審議会答申にあるように、特別支援教育は今日的教育課題の一つであり、2007年4月より特別支援教育が全ての学校での実施が義務となった以上、教員はこのことを回避できない。特に発達障がい等のある児童生徒をはじめとする特別な教育的支援を必要とする児童生徒が、6.5%の割合で通常学級に在籍している可能性を2012年の文部科学省の調査で明らかになった（文部科学省2012）。発達障がい等のある児童生徒への対応は、喫緊の課題であることに誰も異論を唱えるものはいないであろう。本学科の教職課程を履修して卒業する学生には、学校現場で発達障がい等のある児童生徒への対応が一定程度可能なように基本的スキルを獲得させることにした。

本稿においては、「教職実践演習」に発達障がいのある児童生徒への指導のポイントを、ロールプレイ的活動を通して学生は学び、その成果について検討したので報告する。

## Ⅱ 方法

### 1. 「教職実践演習」の実施状況

本「教職実践演習」の対象は、本生涯スポーツ学部スポーツ教育学科所属で、中学校・高等学校教諭一種免許状（保健体育）免許状の取得を目標にした4年次生で80名であった。実施時期は、平成28年度後学期であった。この演習のねらいは、「将来、中学校、高等学校教諭として身につけておかなければならない資質や能力を最終確認する。また、教育実習の反省をもとに、指導に必要な知識や技術の補充を図るとともに向上させる（北翔

回	テーマ	内 容	主なねらい			
			①	②	③	④
1	授業のガイダンス	15回の授業展開の説明。中学校・高等学校教諭としての自己課題の設定やグループワークの指示等。	○			
2	集団討議①	学校教育における現状課題（18歳選挙権と高校教育）（キャリア教育：若者の学校から仕事への移行）		○		
3	集団討議②	（キャリア教育：障がい青年の学校から仕事への移行）（子どもの貧困について）（セクシュアルマイノリティと高校教育について）		○		
4	集団討議③	ロールプレイ的活動を通じた発達障がいのある児童生徒への指導のポイントの学習			○	
5	集団討議④	ロールプレイ的活動を通じた発達障がいのある児童生徒への指導のポイントの学習			○	
6	集団討議⑤	ロールプレイ的活動を通じた発達障がいのある児童生徒への指導のポイントの学習			○	
7	実践を分析する⑥	すぐれた教育実践記録を丁寧に読み解きながら、教師の力量形成に実践記録が果たす役割を考える。		○		
8	教科教育の振り返り①	現職教員の研修の場に参加し、教師としてどのように専門性を高めているのかを学ぶ。（体育領域）	○	○	○	○
9	教科教育の振り返り②	現職教員の研修の場に参加し、教師としてどのように専門性を高めているのかを学ぶ。（保健領域）	○	○	○	○
10	教科外教育の振り返り③	現職教員の研修の場に参加し、教師としてどのように専門性を高めているのかを学ぶ。	○	○	○	○
11	学校現場との連携	①冬季スポーツ指導補助（小学校・中学校）				○
12	学校現場との連携	②冬季スポーツ指導補助（小学校・中学校）				○
13	学校現場との連携	③冬季スポーツ指導補助（小学校・中学校）				○
14	学校現場との連携	④冬季スポーツ指導補助（小学校・中学校）				○
15	まとめと確認： まとめと振り返り	今までの実践演習を振り返り、総括とする。	○			

表1. 本学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科「教職実践演習」（2016年度実施）カリキュラム

\*主なねらいとして、文部科学省の提示による教職実践演習に含めるべきものを以下に示した。①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項 ②社会性や対人関係能力に関する事項 ③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項 ④教科・保育内容等の指導力に関する事項

大学2016)」ことにあった。また到達目標は、「(1) 使命感や責任感、教育的愛情等が身についている。(2) 社会性や対人関係能力が身についている。(3) 生徒理解や学級経営等が理解できている。(4) 教科内容の指導力が身についている（北翔大学2016)」とした。上記に授業計画を示すが、本学発行の講義要項（シラバス）とは、若干修正を加えている。当初の計画では、発達障がいの児童生徒への指導ポイントについて学習する授業を構想してなかった。しかし、第一筆者が今年度から本授業にて3コマ分を担当することに

なったこと、また本演習のねらいの「指導に必要な知識や技術の補充を図るとともに向上させる」ためには、特別支援教育領域の知識等も必要になるという担当者間の認識も生じたこと等により、修正した授業計画を立てることになった。なお、この演習における担当者は、第一筆者を含めて3名であった。

## 2. 集団討議③～⑤（発達障がい児への指導のポイント学習）の実施

集団討議①～⑥までは、80名を40名ずつのAとBの2グループに分けて実施した。その

うち発達障がいのある児童生徒への指導ポイント学習は集団討議③～⑤であった。これらの内容は、集団討議③の冒頭で3コマ分のオリエンテーションを実施し、ねらいや意義、質問紙による自己評定、ロールプレイ的活動を導入すること、その成果を各グループが発表しあうこと等の授業の流れを確認した。オリエンテーションの後、まず、発達障がいのある児童生徒への指導についての不安状態について自己評定させた(表2と表3)。そして発達障がいのある児童生徒の特性に基づいた指導方法を説明した。その際、使用したテキストは、札幌市が発行している発達障がい者のための支援冊子である「『虎の巻』シリーズ」であった。これらの冊子は、平成21年度より札幌市保健福祉局保健福祉部障がい福祉課と札幌市教育委員会が中心となり作成された「札幌市発達障がい者支援体制整備事業」の一環として取り組まれた(札幌市 online: hattatu.html)。このシリーズは、「職場で使える『虎の巻』」「暮らして使える『虎の巻』」「学校で使える『虎の巻』」「学校で使える『虎の巻』」「子育てで使える『虎の巻』」の5巻で構成されており、彼らの特性と支援等について4コマ漫画のイラストを用いて視覚化され、さまざまな立場の人々が学びやすいように工夫されている。第一筆者がこれら冊子の一部の編集にかかわった経験から、学生用のテキストとしても適用が可能と判断し、本演習に導入することにした。なお、集団討議③では、「子育てで使える『虎の巻』」以外の冊子を使用した。

集団討議④では、40名を1グループ5名ずつの8つのグループに分けた。そして、ロールプレイ的活動について簡単に説明し、1グ

ループあたりテキストから2つの場面を選択して児童生徒役、教師役、母親役などの配役を決め、3分程度のロールプレイ的活動を実演するように教示した。また、その際ロールプレイ的活動のわかりやすさと配役になりきることを重視しながら、取り組むようにも伝えた。その後、各グループで発表に向けて討議し合いながら、練習にあたせた。

集団討議⑤では、各グループに2場面のロールプレイ的活動をトータルで6分から8分程度の実演および練習の成果を発表させた。その後、授業のふりかえり(表4)と発達障がいのある児童生徒への指導についての不安状態について、集団討議④で実施した同じ質問紙を使用して再度自己評定させた(表2と表3)。

### 3. 質問紙の構成

#### (1) 質問紙(事前事後)の項目

清水・今栄(1981)は、Spielbergerらが開発したSTAI(the State-Trait Anxiety Inventory)の日本語版(大学生用)を作成し、その信頼性、妥当性などを明確にしながら、原典との対比の可能性を試みた。このテストは、質問紙法による不安尺度であり、「状態不安」と「特性不安」について測定できるとされる(清水・今栄1981)。「状態不安」とは、「ある状況下で大きく変動するような状態としての不安(岩本ら1989)」であり、「特性不安」は「ある個人において比較的一定していると言われる性格特性としての不安(岩本ら1989)」と定義される。前者が徐々に変化する個人の情緒状態としての不安で、後者が不安になりやすい個人のパーソナリティ特性としての不安と考えられる。ちなみに、現在STAIの日本語版の

**自己評定質問紙 1**

学生番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

年齢 \_\_\_\_\_ (2016年10月現在) \_\_\_\_\_ 男性 女性

記入前に：心の状態を表現する文章が下に記述してあります。「発達障害のある生徒への指導」と聞いて、今どの程度感じているか、各文章の該当する番号を○でかこんで下さい。あまり考える必要はありませんが、現在の気持ちを最もよく表現しているものに反応するように心掛けてください。

	全くそうでない	いくぶんそうである	ほぼそうである	全くそうである
1 平静である	1	2	3	4
2 安心している	1	2	3	4
3 固くなっている	1	2	3	4
4 後悔している	1	2	3	4
5 ホッとしている	1	2	3	4
6 どうてんしている	1	2	3	4
7 まわいことが起こりそうで心配である	1	2	3	4
8 ゆったりとした気持ちである	1	2	3	4
9 不安である	1	2	3	4
10 気分がよい	1	2	3	4
11 自信がある	1	2	3	4
12 ビリビリしている	1	2	3	4
13 イライラしている	1	2	3	4
14 緊張している	1	2	3	4
15 リラックスしている	1	2	3	4
16 満足している	1	2	3	4
17 心配である	1	2	3	4
18 ひどく興奮しろほいしている	1	2	3	4
19 ウキウキしている	1	2	3	4
20 たのしい	1	2	3	4

表2. 自己評定質問紙 1

**自己評定質問紙 2**

記入前に：心の状態を表現する文章が下に記述してあります。「発達障害のある生徒への指導」と聞いて、普段からどの程度の状態か、各文章の該当する番号を○でかこんで下さい。あまり考える必要はありませんが、現在の気持ちを最もよく表現しているものに反応するように心掛けてください。

	全くそうでない	いくぶんそうである	ほぼそうである	全くそうである
1 たのしい	1	2	3	4
2 疲れやすい	1	2	3	4
3 泣き出したくなる	1	2	3	4
4 他の人と同じくらい幸せであったらと思う	1	2	3	4
5 すぐに決心がつかず迷いやいやしい	1	2	3	4
6 ゆったりとした気持ちである	1	2	3	4
7 平成・改選で落ちている	1	2	3	4
8 距離なことがかきなら上書きされてしまう	1	2	3	4
9 失敗したこともないが、気になってしかたがない	1	2	3	4
10 幸せである	1	2	3	4
11 物事を難しく考える傾向がある	1	2	3	4
12 自信が欠如している	1	2	3	4
13 安心している	1	2	3	4
14 やっかいなことは避けて通ろうとする	1	2	3	4
15 羞うつである	1	2	3	4
16 満足している	1	2	3	4
17 きさいなことに思いつけずらう	1	2	3	4
18 ひどくびっくりしたときに気分転換ができない	1	2	3	4
19 物に動かないほうである	1	2	3	4
20 身近な問題を考えるとひどく緊張し凝結する	1	2	3	4

表3. 自己評定質問紙2

一部は、幾度か内容等の改良が加えられ新版 STAI 状態-特性不安検査 (肥田野他 2000) として市場に流通している。

本演習では、授業参加者全員に「発達障が

**振り返りシート**

学生番号 \_\_\_\_\_ 氏名 \_\_\_\_\_

年齢 \_\_\_\_\_ (2016年10月現在) \_\_\_\_\_ 男性 女性

質問 1 から 5 の番号順に内容に従って回答してください。

番号	内 容	とてもそう思う。	いくぶんそう思う。	あまりそう思わない。	全くそう思わない。
1	発達障害の指導法を知ることがあったと思う。	4	3	2	1
2	発達障害の指導法を体感することで、彼らに対する理解が深まったと思う。	4	3	2	1
3	発達障害の指導法を体感することで発達障害の子どもに対する指導法が前よりも分かったと思う。	4	3	2	1
4	発達障害の指導法を体感することで今後どのように発達障害のある子どもに接していくか見通しが立つようになったと思う。	4	3	2	1
5	発達障害の指導法を知識として知るだけでなく、体感して知ることは大事であると思う。	4	3	2	1
6	3回の授業について自由にコメントしてください。				

表4. 振り返りシート

いのある生徒への指導」と聞いて、どのような不安を現在感じているのかという「状態不安」、さらに普段どのように感じているのかという「特性不安」を測定することとし、それがロールプレイング的活動を通して、どのように変化するのかを探った。左記に本演習で使った質問紙である「自己評定質問紙」(表2と表3)を示す。

## (2) 授業振り返りシート

本演習では、3コマ目終了時に西川 (2009) による授業の「振り返りシート」を一部修正して使用した。その根拠として、西川 (2009) は臨床心理士の立場から、アスペルガー症候群等の理解が進むための課題を考案し、教員志望の学生を対象に授業で実践し、振り返りシートによる回答をふまえて考察した。その結果、学生たちの発達障がいの特性等に対する理解が深まったとした。この報告は、学生に対する授業方法は異なるが、本演習とほぼ共通したねらいであることから「振り返りシート」の質問項目が本演習の効果を探るためには妥当性があると判断したためである。下記シートを、授業終了後に、授業を受けた学



生に配布して、記入してもらった。このシートの質問は、表4にある5問で、「とてもそう思う」から「まったく思わない」の4件法で実施した。そして質問6として、3回の授業に関してコメント等自由に記述させた。

### (3) 分析方法

受講者の80名のうち、有効回答数が76名であり、残り4名は自己評定の回答欄に一部記述漏れのため分析データに含めなかった。分析方法としては、有効回答者76名の全体のデータをもとに、自己評定質問紙1と2の各質問項目それぞれに対して、受講者一人ひとりの演習前後の数値を求め、平均値と標準偏差を算出した。また演習前後で受講者の回答に有意な差があるかどうかについての統計学的検討には、ウィルコクソン符号付順位和検定を用いて統計学的有意水準を5%未満とした。振り返りシートに関しては、各質問項目の平均値を算出した。統計解析は、Microsoft Excel Statcel 3を使用した。

振り返りシートの質問6の自由記述欄に関しては、Mayring (2004) の質的内容分析を参考とし、受講者によって記述された文章を類似性に基づいて抽出・分類し、カテゴリー化を試みて考察を加えた。

## Ⅲ 結 果

### 1. 自己評定（事前事後）

STAI (the State-Trait Anxiety Inventory) の日本語版（大学生用）による受講者の「状態不安」と「特定不安」の結果を表5と表6に示した。「特定不安」については、演習前後の測定結果の得点に有意差はなかった ( $z = -1.45$ ,  $p = 0.14$ , 表6)。「状態不安」については、演習前後の測定結果の得点が有意に高かった ( $z = -2.16$ ,  $p = 0.03$ , 表5)。

### 2. 振り返りシート

#### (1) 質問1から5

各質問の平均値は、質問1が3.96、質問2が3.78、質問3が3.78、質問4が3.62、質問5が3.94であった。各質問の4件法による評定の内訳を割合で示すと、質問1では「とてもそう思う」が96.5%、「いくぶんそう思う」が3.9%、質問2では「とてもそう思う」が80.2%、「いくぶんそう思う」が17.1%、「あまりそう思わない」が2.6%、質問3は「とてもそう思う」が77.6%、「いくぶんそう思う」が22.3%、質問4は「とてもそう思う」が63.1%、「いくぶんそう思う」が35.5%、「あまりそう思わない」が1.3%、質問5は「とてもそう思う」が94.7%、「いくぶんそう思う」52%であった。

表5. 状態不安の測定結果

カテゴリー	数	平均値	得点範囲	標準偏差	z 値	p 値
自己評定事前	76	38.55	28-50	5.85	-2.16	0.03 **
自己評定事後	76	39.94	25-59	7.80		

\*\*  $p < 0.05$

表6. 特定不安の測定結果

カテゴリー	数	平均値	得点範囲	標準偏差	z 値	p 値
自己評定事前	76	39.85	25-57	6.19	-1.45	0.14
自己評定事後	76	40.97	25-57	7.42		

## (2) 自由記述欄のコメント等

自由記述欄に感想やコメントがあった76名分から抽出したカテゴリー数は5つで、「ロールプレイ的活動の有効性」「指導力の向上」「4コマ漫画の効果」「子ども目線の重要性」「経験不足の解消」であった(表7)。「ロールプレイ的活動の有効性」では、76名中36名(47.3%)がこのことに言及し、「体感して学ぶことで発達障がいの特徴が理解しやすかった」「発達障がいの理解を深めることができた」「他の班の活動から指導法などを学ぶ事ができた」「発達障がいのある生徒にかかわるためのイメージがついた」「発達障がいのある子どもの気持ちが理解できた」など、ロールプレイ的活動の有効性やその効果についてのコメントが多くあった。

「指導力の向上」では、76名中25名(32.8%)がこのことに言及し、「特別支援教育に関する授業をあまりとってないので、指導方法を学べてよかった」「発達障がいのある児童生徒への接し方を学べた」「発達障がいのある

生徒に対して自分ならどのように指導するか考えるきっかけになった」「教育実習で学んだ発達障がいの生徒への指導を復習できた」「子どもの気持ちを理解しながら指導方法を知るようにしたいと考えるようになった」などのコメントが多くあった。

「4コマ漫画の効果」では、76名中9名(11.8%)がこのことに言及し、「発達障がいのある生徒への対応を理解できた」「たくさんの指導法を学んだ」「わかりやすい」などのコメントが多く寄せられた。

「子ども目線の重要性」では、76名中5名(6.5%)がこのことに言及し、「子どもの立場になる」「気持ちがわかる」「生徒の目線にたつ」「気持ちを理解する」などが重要であるとしたコメントであった。最後に「経験不足の解消」では、76名中1名(1.3%)がこのことに言及し、「障がいのある子どもに関わったことがないのでよい経験になった」というコメントであった。

表7. 自由記述欄のコメント等

カテゴリー	コメント
ロールプレイ的活動の有効性	ロールプレイングをすることにより、発達障害のある生徒への指導方法を理解することができた。特別支援の免許を持っていないので、発達障害のある生徒への指導に不安があったが、それが少しでも改善されたと思う。いい意味で、そういった生徒とかかわるのが楽しみだ。
	今回実際にロールプレイングをしてみて、自分たちが行う上で知ることができたこともあったが、他の班の発表を見ることでわかったことや知ることができたことが多く、自分が今後障がいのある子と接する時の対応として役立てることができたら良いと思います。
	特別支援の授業を履修していないので、少しでも知識を獲得する機会があって良かった。しかし、発達障害ではない人が発達障害を演じていても実際とは大きく異なる点もあると思うし、資料のようにうまくいくわけではないと考える。ただ今回のような指導法も実際に現場での指導の選択肢の一つとして、理解し、役立てていきたい。羞恥心を捨ててロールプレイングを行えたことは良かった。その勇気を忘れずに全校生徒の前でも緊張せずに取り組みたい。
	これから教師という立場でやっていく中で、今回ロールプレイングしたような状況、もっと困難な状況になる場面がでてくるのでこの授業での知識はすごく大事なものであると思う。これからもしっかりと学びを深めていきたい。
	発達障がいのある児童生徒への指導法を学び、それを自分達でロールプレイすることで実際に教師として働く際に同じようなことがあったら絶対に役立つ力をつけることができたと感じる。生徒の現状を把握して、どういった働きかけをすることで改善されるのか考えるヒントも得られた。
	人によって障害のとらえ方や伝え方がいろいろある中でロールプレイングによってみることができ、私自身もとらえ方の勉強になった。人によってとらえ方は様々であるが社会に出た時、子ども達が自立できる支援を行いたい。
	自分たちが演じるだけでなく、他の班の発表を見て、様々な障がいをもつ児童への対応のしかたがわかりよかった。このような場面に遭遇しても落ち着いて対処したい。



ロールプレイの活動の有効性	発達障害がある子が具体的にどのような場面で、困難があるのかがよくわかっていなかったが、今回の例をもとに、理解を深めることができました。応用できるようにがんばります。
	実際に自分たちで演じることで、細かい部分や、認識が深まるなどと思いました。発達障害の知識を頭だけでなく、体にも染み込ませるようにしっかりやっていきたいと思っています。
	発達障がいのある児童・生徒がどんなことでつまづいているのか、また、その対処法などを学ぶことができたし、ロールプレイをすることでとても印象に残ったので良かったです。
	実際に演じたり、見たりして発達障害の子の特性にあった指導がどれだけ大切かが分かりました。ちょっとした工夫で理解してあげることができたりするので、特性を理解することが大事だと改めて感じました。
	実際にやってみて、また、他のグループを見ることで、とてもわかりやすかったし、今後の発達障害の指導法に役立つものばかりでした。あわせて、生徒達を不安にさせないよう臨機応変に対応していくためにも、必要なことだと思いました。
	ロールプレイングを通してみんなでグループごとに発表することでそれぞれ演じて学ぶことができたし、見ても学ぶことができてとてもよかったと感じた。特別支援学校だけではなく、通常学級にも発達障害の子は居るので保体の教師になる人もとてもためになったと思う。
	最初、ロールプレイングは無意味だと思っていたが、実際に行なってみると、知識の共有などを班のメンバーですることや実演することにより障がいのある子への知識理解が深くなったので良かったです。
	ロールプレイングにて、発達障害のある児童・生徒をめぐる人々の心情を考え表現することで、より障害自体を肯定的に考えられるようになりました。児童・生徒の困り感を発見し、対応できる教員になりたい。
	このような経験をするのは、とても大事だと、実際にやってみて強く思いました。私は特支をとっていませんが、発達障害の児童・生徒をもつことが普通のクラスでもあり得ることなので、良い経験になりました。
	発達障害の指導法を体感することができて非常に参考になりました。実際は、程度などに個人差があるので、一人一人に合わせた指導をしていきたいと感じました。
	発達障害の勉強だけでも現場ではできないと思いました。種類に応じて指導法は異なり、体感して学ぶことによって身につく良い学びになりました。これから現場に出て活用できるようにもっと学びたいと思いました。
	発達障害の生徒に対して、どのように接すれば良いのか少しわかった気がする。グループで場面の実演をすることで、具体的な指導法を話し合い理解することができた。他のグループを見て、色々なアイデアがあってとても面白かったです。
	実際にロールプレイという形をとることで、児童・生徒に具体的にどのような言葉をかけてあげるか考えるきっかけになり、勉強になった。
	実際に演じることで指導法の見通しが立てやすくなりました。また、一人で指導法を考えるよりも、グループでやった方がアイデアも多く出るので、少し不安が軽くなりました。特別支援の生徒への指導でとても不安に感じていましたが、ロールプレイのおかげで自信が少し出ました。
	知識だけでいくら学んでも限界があると思うので、このようなロールプレイングを行い障害者の気持ちや実際の指導を体験する機会はとても大事だと思うのでとても良かった。
	実際に役を演じることで、発達障害のある生徒の立場から物事を考えることはとても重要だということを改めて感じることができました。また、他の班の発表を見ることで、様々な指導の仕方を知るきっかけにもなったので良かったと思います。
	全員が真剣に演じていくことによって、発達障害の特徴であったり、その対応の仕方などが、様々な面で見ることができ参考になったと思います。それぞれの班のコンセプトがしっかりあり、楽しかったです。
	ロールプレイという形で行うととてもわかりやすく、そのことを理解していないと行えないので、とても良いと感じました。教員になった際、大事な場面で利用したいと思います。
	実際に自分達で演じることで発達障害の子の気持ちになれて、どうしたら分かってもらえるのか、理解してもらうための工夫はどんなことが必要かを知識だけではなく体験できたのですごくためになったと思います。また、指導の現場ではこういう子がいるので工夫していけたらいいと思いました。
	発達障害の生徒がいると言葉で例を言われても、実際に理解したか聞かれると、そうではない。実際に演じて気づくこともあり、先生としてどういう関わりをもてばいいか、前よりイメージがついた。
	自分達が演じることで理解した部分やある程度の対策が見られたので今後につなげていこうと思いました。
	実際に発達障害の子の指導法を劇という形で体験することでクラスにいたときの指導が前よりも分かるようになったので人前でやることは恥ずかしかったけど、自分のためになりました。
	グループ内で、4コママンガの中から2つ選んで、実際に演出してみても、体感できて良かった。また、グループの演出を見て、解決策など学ぶことができた。
	この授業を経験する前や、教育実習前までは、障がいのある人が怖かったし、偏見もありました。でも、実習先での経験や、この授業での寸劇を通して、発達障害の人を身近に感じることができました。もっと発達障害について詳しく知っていききたいです。
	今回の演習を通して、障がいのある児童・生徒への指導法について、実際にロールプレイングすることで知ることができた。教師になった際には今回学んだことを生かしていきたいと思う。
	ロールプレイの中で、障がいのある子演技、発表したが、実際の体験を通して学ぶことができたのでよかったと思う。ロールプレイのように簡単にはいかないとと思うが、教員になってからもがんばっていこうと思う。

ロールプレイの活動の有効性	発達障害のある生徒への指導、対応について学ぶ機会が特別支援の免許を取得する学生に比べると非常に少なかったため、今回、ロールプレイを通して、学習できたのは有意義な時間だったと感じることができた。通常学級の中にもいることがあるので今回の内容を元にして、しっかり指導できるように理解を深めたい。
	「百聞は一見に如かず」と言われているように、授業で教わるだけではなく、自分たちで演じることで、指導を根本的に考える機会となり、とても深い学びが出来た！実際の現場ではより生徒の実態を把握大切にして頑張りたいと思います！ありがとうございました☆☆
	自分達で、実際に演じることで、発達障害者の気持ちも感じることができたし、展開の仕方もよりよくできるようになれるなと思いました。
	自分たちが演じることで、障害についてももっとよく知りたと思ったし、色々な子どもがいるということに改めて気づかされた気がしました。自らが体感して得るものは、やる前には分からないものがたくさんあると思いました。
指導力の向上	私は特支をとっていないので発達障害の子供とは関わることがないと思っていましたが、3回の授業で発達障害の子供に対する関わり方や指導方法を知ることができたのでとても充実したようになりました。後、楽しく授業を受け、発表することができ、満足です。
	発達障害の子がクラスにいることを想定した指導法を楽しみながら学ぶことができたため、今後実際の教育現場に立ったときに少しでも活かせるものになったと強く感じた。
	普通学級に障害がある生徒はいると聞いて、やはり、その児童生徒の特徴やどういった障害なのかを知り、対応や支援を学ぶべきだし、知ることができたので良かったです。
	自分が実際に発達障害の子を相手にすることがあるのかはわからないけど、もしそういう場面になった時に、ただ何もせず過ごすのではなく、何か改善ができたらいとあらためて思いました。障がいのある子を逆に生かせる授業もあるんだと知って、面白いと思いました。
	私は特別支援に関する授業を受けてはいませんが、現状では、普通のクラスにも障がいのある児童・生徒がいるのが当然と言えるほどです。指導法などもわかりませんが、この3回の授業で彼らに対する理解度や接し方がある程度身に付けることができました。この経験を活かせるようにしていきます。
	1コマ目で先生からどのように指導していくべきか、教えてもらい、2・3コマ目でそれぞれを自分たちが実践していくことで発達障害の児童生徒の気持ちを考えるとともに、指導法の理解といった点で、非常に良かったと思います。
	発達障害のある子どもが混在しているクラスで、教師はどのような指導や態度を取らなければいけないのか学ぶことができた。ここで学んだ指導法等は、学校現場に限らず、様々な場面の教育で必要なことだと思うので、より理解を深めたいと感じた。
	発達障害のある子どもへの指導について、教育実習で実際にあったようなことを復習することができて良かった。また、他人の考え方や生徒への伝え方がそれぞれ異なっていて、勉強になった。
	特別支援の講義をあまり受講したことがなかったので関り等を学ぶことができて良かったです。
	ブチケアは生徒の学びを守るためにとても大切であるとわかった。ケアは生徒によって様々な観察をすることが教師には必要だと思った。
	通級にも障害のある子が中にいるので、指導が難しいとは思いますが、そのような状況でもきちんと対応できる指導者になれたらな～と思いました。
	この体験は自分ならどう接するのか、指導するのが自然と考える機会となってくれたと思います。又、他の班の発表は、自分の思考の外からアプローチしてくれたのでとても興味深いものでした。
	発達障害のある生徒に対してどのような対応・指導すればいいかが分かった。また、発達障害の子は悪儀をなくしてしまう行動がこんなにもあることを知ることができて良かった。
	授業を通して、改めて見つめ直すことはとても良かったと思う。教育実習を行う中でも様々な生徒に出会うことでたくさんの接する方法を考えることにつながったので、これからも出会いと指導というものをしっかりと考えていきたい。
	発達障害ときくだけで自分の中でどうしたらいいのか、どのような対応が必要なのかと考えるとわからないことばかりだったが、今回の授業で発達障害ということを理解し、これからの障害のある子たちにあっても対応できる力が身に付いたと思います。
	前まで、発達障害の指導法を少し学んではいたが実際に体感することがなかったので今回の授業で接し方や、指導法を学び、良い経験になったと思います。少し抵抗があった発達障害の指導が前向きな気持ちへと変わりました。ありがとうございました。
	特別支援の授業を受けていなかったのですが、今回勉強することができて本当に良かったと思った。発達障害のある生徒に対して、自分ならどうするか考えながら授業に取り組むことができた。
	発達障害は個人によって症状が違うので、個別に対応できる能力を教員は身につける必要があると、改めて感じました。障がいがあるからという理由でできることが少なくならないように支援・指導ができるような教員が増えるといいなと思いました。
	四コマ漫画の通りではなく、自分たちで考えた指導方を混ぜて劇をしていたが、全体の中で1人に注目を当てて指導をしてはいけなかったことがよく分かった。特別支援では、一人一人の実態を把握しそれぞれにあった教材や手立てを行うので、より生徒の観察と適切な指導が大切だと再確認した。

指導力の向上	実際に自分が実習に行ったときもそうでしたが、普通学級に、一緒に混ざって過ごしている子も、たくさんいると思うし、中学や小学校の時自分のクラスにも思いあたる人がいたりするので、しっかりとした接し方が学べて本当に良かったです。
	発達障害のある子どもに対しての指導方法や、言葉遣いや、どういうことに留意すべきかを知ることができた。プリント以外でも、子どもの気持ちになって自分なりのいい指導方法を知る努力をしようと感じることができた授業でした。
	発達障害のある子に対して、どう接したらいいかわからない部分が多かったが、3回の授業と実演してみて、理解できた。皆の演技を見て、あんな子いそうだなと思ったときに、対処法を学ぶことができた。
	実際に現場へ出た際に、通常学級でも発達障害のある生徒はいるはずなので、3回の授業を通じて、指導法について知ることはすごく自分のためになりました。まだまだ知らないことばかりで不安もありますが、一人一人の子どもが自分の力を最大限発揮できるように指導していけるようにしていきます。
	実際の教育現場で起こりそうな事例を自分達で行うことで障がいのある人の気持ちだったり、生徒としての接し方や教員の場合は、このように全員がしっかりと気持ちよく授業を受け入れたり、学校生活を送れるような工夫を少しでも今回の授業で学べたので将来、教員になったら生かしていきたいです。
4コマ漫画の効果	4コママンガで発達障害のことがかかれていて分かりやすく、どのようにすれば良いのかも分かりました。実際に演技するのは、難しかったが、自分のためになったと思った。発達障害について知れる良い機会であったと思いました。
	9月に中学校の教育実習を行い、自分がいた時よりも障害がある生徒が多くて、どんどん増えているという事を実感しました。その事もあり、今回の授業はとても自分のためになったし、11月からの特支の教育実習で役立たせることができると思いました。また、4コマ漫画にすることですごくわかりやすかったと思いました。
	4コマ漫画形式で学習することで、発達障害のある生徒への対応の仕方が少しではあるが理解できたと思う。また、対応の仕方は障害のあるないに関わらず使えるのではと感じた。
	みんなの前では注意しないで個別に呼んで指導することを学びました。4コママンガで沢山の指導法を学べて良かったです。
	実際にやってみると、難しさや注意点が多く、戸惑うこともあると思って講義を受けていました。4コママンガもわかりやすく、それぞれで対応を変えたりすることや臨機応変にしていきたいと思いました。
	4コマを通して障害がある子に対しての声かけ方や指導の仕方が理解できて良かったです。
	ただ話を聞くだけでなく4コママンガでわかりやすく理解できたり、演劇でさらに理解が深まったと思う。
子ども目線の重要性	1, 2回での『学校で使える「虎の巻」』での説明では、図もありわかりやすく、とても良い勉強になった。また、3回目での実演では、実際に、生徒や先生の気持ちの理解を深めるためにとても良い時間になったと思う。
	説明だけではなく絵と図で書かれている資料だったので理解しやすかったです。実際に役になってみることでより障がいのある子どもに対してどのように接していけばいいのか、どう指導すればいいことがわかりました。
	発達障害の子どもへの模擬授業や、子どもとの触れ合いを学んできたが、“演じる”となると子どもの立場、世界を深く考えなければならなかったのが、良い経験だった。“子どもの立場になる”ことはすごく重要だと再確認した。
	体感することで、何を考えているか少しでもわかるのでよいと思った。発達障害の子どもたちを、少しでも気持ち分かる授業であったのでとてもよかったと思います。
	実際に体験することで、生徒側の気持ちになれるので良いと思った。生徒の目線に立つことは生徒理解が深まるので体験できて良かった。
の経験消不足	普段は発達障がいのある子どもたちのためにどうすべきか考え学んでいるが、今回のように子どもたちの立場になって考えることは初めてだったので教員を目指すうえでは大事だと思った。
	身近な生活で行われていることが、実は何らかの障害による行動だったことが分かりました。障害を理解するためになりきって気持ちを理解してあげることがとても大事だと分かったし、今後に繋げていける授業だと思いました。
の経験消不足	自分自身が実際に障がいを持った児童・生徒と関わったことが、ほとんど無いので、おおまかではあるが、体感できて良かった。

## Ⅳ 考 察

### 1 自己評定による受講者の特徴

#### (1) 不安への着目と測定

本学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科に

おいて、教職課程の履修を希望する学生は、「中高保健体育一種」と「特別支援学校一種」の2種類の教員免許の取得が可能であると冒頭で述べた。しかし、毎年、これら2種類の免許を取得して本学を卒業していく学生は少

なく、「中高保健体育一種」のみの取得を希望する学生にとって、特別支援教育に関する知識などに触れる機会は、2日間の特別支援学校「介護等体験」のみと言えよう。平成19年からの特別支援教育の本格的運用による通常学級在籍の発達障がい等のある児童生徒への適切な指導が教員に要請されている中で、彼らにどのように対応してよいのかわからなかったり、不安になったりして本学を卒業していく学生もいると思われた。

したがって、発達障がい等のある児童生徒への指導に対する学生の不安に着目することで、3コマ分の本演習による成果および受講者の特徴を把握できると考えられた。本演習前後の受講生の不安状態に増減が生じれば、その成果について検証可能となり、また受講生の特徴も明らかにできると思われた。このことを検証するために、清水・今栄（1981）による大学生に焦点化したSTAI（the State-Trait Anxiety Inventory）の日本語版（大学生用）の心理テストを採用することにした。このテストでは、ストレス事態での情動変動等の「状態不安」と個人の性格特性等の「特定不安」が測定できるとされる（清水・今栄1981）。すなわち、本研究においては、発達障がい等の児童生徒の指導に関する本演習直前の「不安」と普段の状態での発達障がい等の児童生徒の指導に関する「不安」が測れる可能性が考えられた。

## （2）STAI日本語版（大学生用）による受講生の特徴

表5にあるように、本受講生による「状態不安」について、事前の自己評定におけるSTAI日本語版（大学生用）の得点の平均

値が38.55であったが、その事後においては、その平均値が39.94と上昇した。さらにこれらについてウィルコクソン符号付順位和検定を実施したところ、演習前後では有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。これらの結果から、演習を実施した後に受講生の不安が増大したことが明らかになった。

中南ら（1991）は、この「状態不安」について、「一時的な情動状態としての不安」であり、「置かれた状況や経験するストレスによって主観的あるいは意識的にどのように事態を受け取ったかの緊張と概念の感覚」と説明した。これに従えば、受講生らは、本演習を通して一過性の不安と事態の受け取りで緊張を生じさせたと考えられ、発達障がいのある児童生徒への指導について、漠然とした曖昧であった理解が、リアリティを含んだ感覚を喚起させ明確な理解へと促されたと推測される。すなわち、本演習実施の時期は11月であり、受講生の中には、来年4月から教育現場で勤務することを願っている者が大多数いたが、約半年後には自分がロールプレイング的活動で演じた状況下に置かれることに気づいたことが一つの要因と考えられた。

中山ら（2006）は、看護学生を対象にしてSTAIを用いた実習における不安の変化を検討した。それによると「状態不安」について実習前よりも実習後の方が上昇し、その要因の一つには対象学生がこの調査から2か月後に看護師国家試験を控え、緊張感の高揚があったためと推測した（中山ら2006）。中山ら（2006）の研究報告と本研究では、対象となる学生は異なるが、彼らの目の前に変化をもたらすであろう大きな状況がやがてくるという点においては、同型と考えられる。従って



中山ら（2006）の「状態不安」に関する知見は、本研究による考察を支持するものと考えられる。

STAI日本語版（大学生用）による受講生の特徴は、ロールプレイ的活動を通して発達障がいのある児童生徒に対する指導を学習したが、結果として一過性の不安を増大させたと言えるであろう。しかし、不安を増大させたとしても、そのことがかえって発達障がいのある児童生徒への指導を前向きにさせていることも同時に起きたことを次節で見ていきたい。

## 2. 振り返りシートの分析

### （1）質問1から5

振り返りシートにある各質問の平均値は、質問1が3.96、質問2が3.78、質問3が3.78、質問4が3.62、質問5が3.94であった。いずれも高得点であり、受講生の多くが本演習について高評価したことが明らかになった。質問1の「発達障がい者に対する指導法を知ること」と質問5の「発達障害の指導法を体験して知ること」の重要性が、特に受講生から支持を得ていたと考えられる。

西川（2009）は、臨床心理士の立場から、アスペルガー症候群等の理解が進むための課題を考案し授業にて実践した。受講生はアスペルガー症候群等の感覚を理解できるように疑似体験を通して学習できるように工夫されていた（西川2009）。この授業を通して西川（2009）は「いくら知識を持って発達障害児に寄り添おうと思っても、実際に体験したこととそうでないことは、共感の深さが変わってくることを明らかにし、障がいの理解に体験が有効であることを示唆した。本演

習においても体験を重視した内容になっていた。西川（2009）による指摘は、本研究の中核である「指導法を体験で知ること」と重なると考えられる。発達障がいのある児童生徒への指導について、体験をベースにした学習スタイルが有効であることが示唆されたと思われる。

### （2）自由記述欄の分析

自由記述欄に感想やコメントがあった76名分から抽出したカテゴリー数は5つで、「ロールプレイ的活動の有効性」「指導力の向上」「4コマ漫画の効果」「子ども目線の重要性」「経験不足の解消」であった。「ロールプレイ的活動の有効性」について、受講生の半数近くが、ロールプレイ的活動による発達障がいのある児童生徒への指導について学習したことで、その理解が深められたり、具体的なイメージがわいたり、子どもの内面性理解につながったりなどと、この学習スタイルの有効性を述べた。

「教職実践演習」にロールプレイを積極的に導入している梨木（2012）は、ロールプレイを「シミュレーション」として位置づけ適応範囲が広い用語とした。また教育実習自体が、ロールプレイの一種であるとする見方を紹介しながら、「教師という役割を演じてみて、自分にその役割が適合していると思う者はいっそう教職への熱意が高まるし、自分には合わない判断した者は教職から遠ざかる—そのような判断を役割演技によって洞察する場として実習が機能している（梨木2012）」と述べ、ロールプレイが学生の教師としての資質を洞察するために機能するとした。このような示唆は、本演習の受講生のコメントか



らも確かめることができると思われる。すなわち、振り返りシートのコメントを5つのカテゴリーにしてみると、「4コマ漫画の効果」以外は、学生が発達障がいのある児童生徒へ指導を洞察した結果であるとも言えるであろう。カテゴリーの「ロールプレイ的活動の有効性」「指導力の向上」「子ども目線の重要性」「経験不足の解消」教師の資質の一つである「指導力」に直結することと考えられるので、本演習におけるロールプレイ的活動が、それらに目を向ける契機になったと考えられる。

梨木（2012）によれば、ロールプレイをスムーズに展開するには「学生の側にある程度のトレーニングと力量が必要である場合が多い」としており、本演習ではロールプレイの内容と手続きを簡潔に説明しただけであった。それゆえに「ロールプレイ」とはせず、「ロールプレイ的活動」として位置づけたが、学生のコメントを検討してみると自由記述欄には、「ロールプレイ的活動」という用語が見当たらないので、十分にこの点について伝わっていないと考えられ、今後の課題になると思われる。

### 3. 今後の課題

基本的に「4コマ漫画」と「ロールプレイ的活動」で構成した3コマの演習であったが、受講生には発達障がいのある児童生徒の指導を洞察させる契機になったと考えられる。しかし、本論文では「4コマ漫画」については十分に検討することができなかったため、今後はこの周辺の情報を取り込みその有効性について考察をすすめていきたいと考えている。「4コマ漫画」によって発達障がいのある児童生徒への指導の理解が深まったとする学生の

コメントが一定数あったので、その要因を分析することは「教職実践演習」の3コマをさらに機能させるためにも必要と思われる。

### 4. まとめ

本演習3コマを受講した学生は、ロールプレイ的活動を通して発達障がいのある児童生徒に対する指導を学習したが、結果として一過性の不安を増大させたと考えられる。しかし、そのことの背景の一つには、発達障がいのある児童生徒への指導について、「4コマ漫画」を教材にしてロールプレイ的活動を導入したことで、漠然とした曖昧であった理解が、リアリティを含んだ感覚を喚起させ明確な理解へと促されたと推測された。すなわち、受講生に対して数か月後には教育現場につくという現実を深く認識させそれに向き合わせる契機になったと考えられた。

## 文 献

- 中央教育審議会（2006）「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」
- 國原幸一朗（2016）「実践的指導力習得に向けた「教職実践演習」の視座」,名古屋学院大学論集,社会科学篇, 53(1), pp103-139
- 文部科学省（2012）「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」
- 姫野完治・石橋研一・神居隆・斎藤孝（2011）,「教職実践演習のカリキュラム開発と試行」,秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 33, pp123-132
- 北翔大学2016「講義要項Syllabus 生涯スポー

- ッ学部4年次」pp1-41
- 清水秀美・今栄国晴（1981）「STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版（大学生用）の作成」, 教育心理学研究, Vol.29, No.4, pp348-353
- 岩本美江子・百々栄徳・米田純子・石居房子・後藤博・上田洋一・森江堯子（1989）「状態-特性不安尺度（STAI）の検討およびその騒音ストレスへの応用に関する研究」, 日本衛生学雑誌, 43(6), 1116-1123
- 肥田野直・福原真知子・岩脇三良・曾我祥子・C. D. Spielberger（2000）「新版STAI マニュアル」実務教育出版
- 西川絹恵（2009）「アスペルガー症候群と特別支援教育—アスペルガー症候群の疑似体験を通じて臨床心理的視点を学ぶ授業実践—」愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 12, pp21-28
- Mayrig, P（2004）「Qualitative Content Analysis」, Uwe Flick, Ernst von Kardoff, Ines Steinke, A companion to qualitative research, pp266-269
- 中南匡史・大前泰三・伊藤博子・赤西正光・丸山剛郎（1991）「顎口腔機能異常者の不安傾向について-STAIにおける状態不安および特性不安から」, 日歯心身, 6, pp140-147
- 梨木昭平（2012）「教職科目「教職実践演習」に向けての試み」, 太成学院大学紀要, 14, pp267-278
- 中山和美・寺田眞廣・星山佳治・菅原崇博・渡辺理江・神山吉輝・川口毅（2006）「看護学生の長期実習前後の心理変化と実習成績の関連に関する研究」, 昭和医学会雑誌, Vol.66, No.1, pp29-37
- 札幌市「健康・福祉・子育て, 発達障がい支援情報のページ」 <http://www.city.sapporo.jp/shogaifukushi/hattatu/hattatu.html#toranomaki>（2016年 1月27日）